

戦中戦後の体験、証言を映像に

戦中戦後の激動の時代を生きた体験を、自ら語る映像で記録し、ウェブサイトで公開するイタリア生まれのオンラインアーカイブ「記憶の銀行」の取り組みが日本で始まった。お年寄りの貴重な証言を後世に残そうとの試みで、家族らが撮った映像も送ってほしいと呼びかけている。

(外尾誠)

「疎開中は先生が毎日、弁当の中身を調べてね。ぜいたくは敵だから白米はだめだった」「代用そばがおいしかったね」。年配の男性が、第2次世界大戦中の食事の思い出を語る。ウェブ上で公開されている映像の一コマだ。

「記憶の銀行」はイタリアの若者4人が一昨年に開始。映像データがネットで手軽にやりとりできるようにになったこともあり、米、独、カメルーンなどイタリア以外の9カ国に広がり、全体で約2千本以上の映像が集まっている。

日本版は、東京在住のイタリア人チンツィア・ドルチーニさん(31)が昨秋、母国の「記憶の銀行」運動を知ったのがきっかけ。メールで感想を伝えると「ぜひ日本で

も」と伝えられた。ドルチーニさんを代表にNPO「MEMORO」「記憶の銀行」が発足し、先月、日本で公式サイトを立ち上げた。いま、日本人約10人がスタッフとして映像編集やサイト運営などを行っている。その1人の富田直子副代表(39)は「世界の人びとの経験をリアルに簡単に知ることができるのが魅力」と話す。

現在、閲覧できるのは、MEMOROが撮影した家族や知人の映像約30本。今後も撮影を続ける一方、家庭などからの映像の投稿も呼びかけている。歴史、場所、社会、生活、仕事、飲食、教育の6分野の思い出を1本5分前後の映像にまとめ、サイトに送ってほしいという。普通の人びとの暮らしや

横浜市で1月に行われたインタビュー。女性がカメラを前に「記憶」を語ったMEMORO「記憶の銀行」提供



喜び、悲しみに触れることができるアーカイブにするのが目標だ。

ドルチーニさんは「家族のコミュニケーションを増やすきっかけにもなれば、うれしい」と話す。

4月25日に東京都内で撮影のコツなどを紹介するセミナーを開く。

公式サイトは<http://www.memoro.org/jp-jp/>

info.org/jp-jp/